

スポット展示 原始の時代の 'もったいない!'

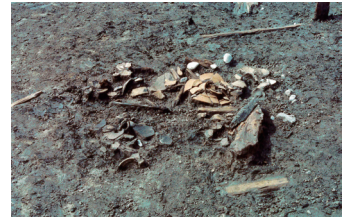
2026. 4. 6~6.16

古高町に所在する下長遺跡では、遺跡の中央を流れていた旧河道が見つかっています。

弥生時代後期以降に流れが衰えはじめた旧河道からは、廃棄された土器や木器が大量に出土しています。場所によっては、土に埋まったというより土の代わりに土器が堆積していたという表現が適切に思えるほどの状況です。

このような光景を目の当たりにすると、生活必需品が使えなくなるや廃棄していた消費社会がイメージされがちです。

しかし、出土品を丹念に見ると、原始の時代のモノを大切にしていた「もったいない」感覚が見えてきます。ここでは、そのいくつかを紹介いたします。



木器や土器の検出状況（下長遺跡）

原始の時代の 'もったいない!'

旧河道から出土した広口壺には、底部から下胴部にかけてのひび割れ箇所にウルシを幅1cmほど接着剤代わりに塗布した補修痕が見られます。

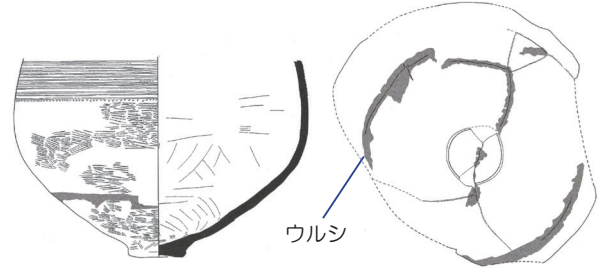
あいにく、口縁～上部部を欠損していますが、最大径 30 cm程の器体はやや下膨れ状となり、赤彩を施した後、楕円描き直線文と列点文で加飾しています。東海地方のパレススタイルの壺の影響がうかがえます。

土の造形である土器は割れると、物理的に補修は難しく通常は廃棄されますが、補修して使い続けたのは、代替性がなく、どうしても使い続けなければならなかった特殊な壺であったためかもしれません。大変レアなケースです。

ウルシを接着剤代わりに器を接合する技法は、古くは縄文時代にまで遡ります。古代には、寄木造りの仏像の木材の接合に使われていました。現在でも、黒漆継ぎ、金継ぎなどの工芸分野に受け継がれています。



ウルシで補修した壺（下長遺跡）



ウルシ

0 20cm

ウルシで補修した壺（実測図）

木器・木製品の 'もったいない!'

木材でつくられた木器・木製品には、最後まで使い続けたことがうかがえる多様な補修痕を数多く見ることができます。

腰掛はほぼ半分に割れた状態で出土しています。しかし、割れ面にはやといほぞ 雇柄という別材を挿入して、割れた二材を結合した補修痕が見られます。

展示している槽（容器）にも補修痕が見られます。下に掲載する写真のような木材を割り抜いてつくられた方形状の浅い容器の一部です。前出の腰掛も槽もスギなど針葉樹を用材としていて、木目に沿って割れやすい欠点があります。この槽も割れたため、樹皮（サクラ）を巻いて割れを補修しています。



腰掛（入江内湖遺跡）

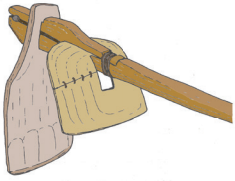


槽（下長遺跡）

また、古墳時代前期の時期には、鉄製農具がまだ十分に普及していなかったため、アカガシなどの堅木でつくられた木製の農具が使われていました。土を耕すくわ 鋤には泥はねを防ぐための泥除けが取り付けられていますが、薄い板材であるため割れやすく、割れを紐で補修した紐通し孔が見られます。



補修孔のある泥除け（服部遺跡）



泥除け装着復元図（黒崎直 1988）木器、木製品づくりのために用意されていたのでしょう。

奈良時代の歌人、山部赤人の詠んだ短歌にある「(前略) 枕も巻かず 桜皮(か) 巻き 作れる船に 真楫(ま) 貫き (後略)」は「寝る間も惜しんで、桜の皮を巻いて造った船にしっかりと櫓やぐらを取り付けて」と解釈できます。このことからサクラの樹皮で船材を結合することが造船技術に採り入れられたことがわかります。

また、薄い板材を円筒状に曲げた中世の曲物容器も板材の重なった箇所をサクラの樹皮で綴じています。

弓には弾力性あるイヌガヤ、棺には水に強いコウヤマキを使っているように原始の人々は、用途に応じて適性のある樹種を選定していました。

現在ほど資材は豊富ではありませんでしたが、木製の器や製品は、同じく木質の材料によって修理や製作することの合理性を会得していたのでしょう。

この他にも、補修して使われ続けた木器や木製品を多数見ることができます。

展示はしておりませんが、櫓そりのように泥土の上を滑らせて物を運搬する田舟が出土しています。使い減りで底が薄くなり割れたため、3か所に2孔一対の補修孔をあけて割れを修繕しています。

全長約 2.1 m、幅約 60 cmの大きさの田舟を作るには相当大きな木材が必要となるため、メンテナンスしながら大切に使用していたと想像できます。

木器、木製品は、紐やサクラの樹皮、雇柄で結合して補修されていることがわかりましたが、なかでも、樹皮を巻いての結合はポピュラーな補修方法であると同時に製作技法でした。

例えば、やまと琴の琴板と共鳴槽、準構造船の船底部げんそくぼんと舷側板の結合にも使われています。サクラの樹皮は耐久性があり、通常は巻いた樹皮が緩まないように楔止めしています。そのため、ヘビータンナーな船材の結合にも使われたようです。

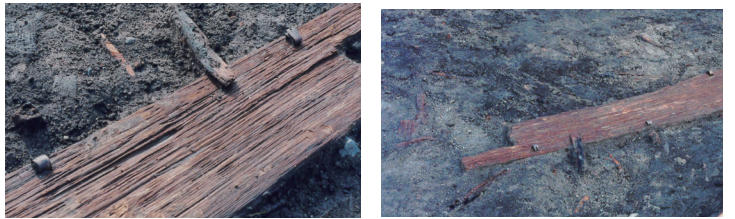
下長遺跡では、幅 3～4cmのロール状に巻かれたサクラの樹皮が単体で出土しています。補修用か、



補修孔のある田舟（下長遺跡）



準構造船の船底部と舷側板の結合部分（下長遺跡）



共鳴槽と樹皮結合の痕が残る琴板（左）と琴の出土状況（右・下長遺跡）

石器や石製品も 'もったいない!'

石でつくられた石器や石製品からもモノを大切にしていたことがわかります。

下長遺跡では、石釧いしくしろが2点出土しています。石釧は手首を飾る腕輪で、首長が権威を誇示するための威儀具のひとつです。2点ともに破損していますが、そのうちの1点には小穴が穿たれています。貴重な石釧が割れたための補修孔と考えられています。



補修孔のある石釧（下長遺跡）

また、鉄器は、石器に代わって次第に普及し始めます。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺跡からは磨製石斧類は出土しなくなる反面、砥石類の出土が多くなります。また、木製の農具は依然出土します。



研ぎ減りした砥石（下長遺跡）

金属器を研磨した砥石は、研ぎ減りのため凹状になるまで使われたことがわかります。このことから、石器から鉄器への移行は工具から始まり、農具への普及は次の段階に始まることが推察できます。



石釧（沖ノ島遺跡）

そして、鉄器やそれとともに使われた青銅器は廃棄されることはなく、鋳潰してリサイクルされたことが容易に想像できます。

このように、発掘調査で出土した大量の土器や木器の印象とは違って、モノを大切に使う精神文化が根付いていたことがわかります。

守山市立埋蔵文化財センター

〒520-2411 滋賀県守山市服部町2250番地

TEL & FAX 077(585)4397/mail: maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

2026.4.